

提出日：令和 3 年 2 月 24 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名： 根尾 櫻子 職位： 講師

## I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）				
科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医内科実習	獣医・獣医	必	5	151
小動物臨床実習	獣医・獣医	必	5	152
小動物病院実習	獣医・獣医	選	6	COVID19 の影響で 開講せず
臨床病理	獣医・獣医	必	4	150
小動物獣医総合臨床 (I～IV)	獣医・獣医	必	5	152
総合獣医学	獣医・獣医	必	6	135
卒業論文	獣医・獣医	必	6	2
獣医学特論	獣医・獣医	必	6	2

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

**【教育理念】**

① 学生が主体的に問題を解決し、また、疑問を同級生や教員と協力して最適な方法を自らみつけて解決する方法を学べる教育。

② 将来、限られた時間やツールで疑問解決に結び付けられるようにするためにけじめのある授業。

③ 学習を定着させ、将来に向けての学修を実施することで、卒業後の社会でも不安なく問題を解決する方法を身につける授業。

**【教育理念を遂行するための自分の教育アプローチ】**

獣医学部での教育を受けた後、学生は、小動物や産業動物臨床、公務員、製薬企業、研究職など様々な分野に進んでいく。どの分野においても常に解決をしなければならない問題や疑問は発生する。その際には学生時代に培った問題解決能力が重要である。将来的に問題可決ができる能力をつけるために、学生時代にまず、個々で問題を解決する解決法を、筋道を立てて考え、周囲の同級生や教員とアイディアを出し合いながら最適な方法を見つけることを達成できるように教育する。また、昨今は時代の流れが速く、解決するために必要な時間を制限されることも多々生じる。その時のために、時間内に学修ができる様に学生を導く。また、卒業

後、新しい社会で困難を感じた時にも不安を和らげられるように、学習を定着させること、また、困った時には仲間や大学の教員に相談することも解決策であることを教える授業を遂行する。

### 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

#### 【教育の目的】

将来獣医師免許を持った際に、不安なく活動できるように必要な知識と問題解決能力を持てるようにする。

#### 【教育目標】

国際的に通用するレベルの教育を行うこと。

#### 【教育内容】

アメリカの獣医学教育の中で3年間自身も専門医教育トレーニングを受けた自身の経験をもとに、国内においても、10年進んでいると言われている欧米の獣医学教育と同等の教育を行うことを目標として常に教育を行なっている。獣医師にも専門があるように、学生にも得意な科目、不得意な科目がある。不得意な科目である場合にはそれを仲間と協力することで克服していくことを教えている。また、将来仕事をする上で大切なことは、もちろん自分自身の能力を高めることもあるが、それ以上に、その時々の問題点（例：重症例の診察、治療など）が解決できることであり、それを行うためには、学生が、自分の力だけでなく、相手の意見を受け入れ、協力して問題解決に取り組めるように気にかけている。

#### アクティブラーニングについての取組

特に、5年生の小動物臨床実習（参加型臨床実習）、また、今年度は COVID19 の影響で開講できなかったが、6年生の小動物病院実習（臨床病理）では、血液、骨髄、細胞診のスライドを学生さんに通常は顕微鏡で、今年度は web で配信した標本の写真を用いてまず診断をしてもらう。診断を進める上では、学生同士で積極的に意見交換をすること、また資料を活用することを推奨している。自分たちの力で解決ができるところまで解決し、またその解決に至るまでに協力をすることを学んでもらう。そうすることで、将来的に動物の診療のみならず、何らかの問題を解決しなければいけない際の問題解決能力を育成できると考えている。学生間で診断（問題解決）を行ったのち、参加型臨床実習では、教員1：学生6人、また小動物病院実習では教員1：学生2-3人でディスカッションを行い、どの様にしてその診断に至ったか、説明してもらい、教員側としては解説を交えながら、また学生には積極的に質問をしてもらい、彼らの疑問を解決しながら最終診断に至るまで、段階的に教えることを心がけている。

#### ICTの教育への活用

今年度は残念ながら COVID19 の影響で前期の6年次の実習は開講できなかったが、後期は、5年生の参加型臨床実習を Meet にて行えたので、各学生に教員側から

順番に質問をし、アクティブさを保持することを心がけた。また、学生にも積極的に質問をするように推奨した。また、教育改善プログラムとして「細胞鑑別 e-ラーニング」を用いた ICT 教育を提案する前段階で、実際に参加方臨床実習で「プレ細胞鑑別 e-ラーニング」の試行を行い、血液細胞を自分の力で分類するというテストを行った。

#### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ① 教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）：B
- ② 学生の理解度の把握（A～C）：B
- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C）：B
- ④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）：B
- ⑤ 双方向授業への工夫（A～C）：B

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

- ① 教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）：B

授業は、各授業の間に学生がある程度の段階まで理解できるように、また理解をどの様にしていくか、筋道を立てられるように、授業内でポイントのスライドを作成し、ポイントを理解できる様に心がけている。しかし、まだ全体的な成績向上率は低いことからよりポイントを絞った授業をしたいと思う。

- ② 学生の理解度の把握（A～C）：B

COVID19 の影響で評価に加えた小テストやレポート作成では、理解度がある程度確認できたことから今後も実施する計画である。しかし、オンラインでの解答で理解度を把握するのは限界があるということも実感した。

- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C）：B

レポートの実施は良いと思う。今後も実施したい。

- ④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）：B

質問に対しては、COVID19 の影響で対面ができなかったため、メールでの回答が主体であった。実際には対面で質問に解答した方が理解度も深まると感じている。

- ⑤ 双方向授業への工夫（A～C）：B

やはり、オンライン授業で双方向というのには限界を感じた。主に質問などはメールが中心であった。もしオンラインが続くのであればチャット機能を利用できる様にするなど、改善も必要であると感じた。

- ⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

臨床病理や小動物総合獣医学などの授業では、授業中に国家試験で出題されていたところは、国試に出題されたところだから特に重要です、と授業の中で伝えた。5年生の参加型臨床

<p>実習では、顕微鏡を使った細胞診の実習で、実際に学生が診断をするという実習を行うが、それを解説する中で、国家試験に出題された問題を提示しながら、国家試験を受けるにあたり、知っておくべき細胞の見方を教えた。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>現在コーディネーターを務める臨床病理では、毎年、第1回目の授業で学生さんに授業評価を公表し、対策を示す。学生さんに対しては、授業でわからない所があれば質問をしてください、と毎回伝える。臨床病理に関しては教員に対して少しレベルを落として理解しやすい授業を試みてくださいと数年前（前コーディネーターからの試みであるため10年くらい経つのかもしれない）よりお願いしてきた。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>数年前と比較すると全体的にはわかりやすくなっていると思うが、依然として難しい教科であり、また、まとまった、よい教科書がないことがおそらく原因して理解度が深まらないのではないかと感じている。</p> <p>② <u>②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。</u></p> <p>担当各教員により、各授業の授業後に小テストまたはレポートの実施を行い、各授業において、理解度を深めることを試みる予定である。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>各授業の中で、各ポイントをある程度把握することが重要であると思われるため、教員には、各授業のポイントをまとめたスライドを入れるようお願いした。また、COVID19の影響で小テストまたはレポートを実施したが、各授業の把握には効率的と考えられることから、次年度も実施する予定である。</p> <p>② <u>教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</u></p> <p>参加方臨床実習に関しては、一つ一つの症例に関して詳しく聞いて良かったという感想ももらった。</p> <p>卒論研究の成果としては、卒業論文のテーマとして獣医学領域で初めて行う研究、『Eryptosis on Dogs』を遂行した学生が2019年度欧州臨床病理学会（ESVCP）：Joint Congress of Veterinary Pathology and Veterinary Clinical Pathologyで優秀ポスター賞を獲得し、2020年度からドイツのHeinrich Heine University Duesseldorfにて大学院生として研究を始めることができた。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）</p> <p>FD研究会には、外部との外せない会議と重ならない場合は出席し、出席できない場合は、録音されたものを聞かせていただいた。</p>

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

短期目標

授業評価で、学生さんが授業を楽しめた！理解できた！との反応を得ることを目標としたい。

長期目標

卒業後に麻布大学で学んで良かった！と思ってもらおう。さらに我々の行なっている臨床教育を受けた学生が獣医師として麻布大学動物病院に戻り、麻布大学動物病院がより発展すること、さらに麻布大学で学べば国際レベルの獣医師となれるようにすること。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

（自ら作成するもの）

1. 授業に関するもの

シラバス，小テスト，レポート課題，試験問題，教材（配布資料，パワーポイント資料など）

2. 教育改善に関するもの

（教育改善プログラム補助金獲得，FDプログラム参加，複数年のシラバス）

（他者から提供されるもの）

1. 学生から

授業評価データ，授業に関するコメント

（教育/学習の成果）

指導学生の学会発表，学生の進路選択への影響